

## 〈超越〉についての心理臨床学的研究

—「自分を越えた何か」の体験の語りを手がかりに—

大 家 聡 樹

### 1 はじめに - 私が〈超越〉を考えるにあたって -

我々は生きてると「自分の力を越えた、または人間の力ではどうすることもできない」という意味で超越的な力を体験することがある。例えば、阪神淡路大震災などの大きな自然災害はそれに当たるだろう。それは人間の意図を超えて突発的にやってきて、それまで自明であった世界を容赦なく破壊する。また、例えば夢半ばにして突然不治の病に冒されたりすることもあるだろう。人間はそのような自分を越えた力によって破壊され、自明性の失われた世界を生きることを余儀なくされるという意味で、そうした力をこうむった人間はそれまでのあり方を問い直し、必要に応じた変容をせざるを得なくなる。こうした力は、人間の意図を超えたところからやってきて、それに対して人間が統制感を持たないという意味では、「自分を越えている」と言え、その意味で超越的な体験であるといえるだろう。

反対に、自分があずかり知らぬ力によって自らが守られていたり、繋がっていたりするという体験する場合もあるだろう。例えば、普通ならば死んでもおかしくないような事故にあったのに、奇跡的に無傷だったというような場合が考えられるだろう。その際には、自分を越えた力による奇跡に感謝を覚える。また、遠くに住んでいる親戚が亡くなった時刻に、その人の夢を見ていたというような場合においては、その自分の意識的な認識を超えた繋がりに対して、神秘的な感動を覚えるかもしれない。

しかし、こうした非日常性を端的に感じる例を挙げるまでもなく、筆者が一人の人間として生きている日常生活を振り返ってみれば「自分を越えた何か」にまつわる事象はいくらでも存在しうる。考えてみれば、太陽がなぜ東から上ってきて西へ沈み、その運行によって朝が来て、また夜がくるのかとか、どうして私がこの世に生まれてきたのか、そしてどうして死んでゆくのか、というごくありふれた誰もが体験することが可能であり、自明であるような事象一つ取ってみても、それに適切に応えるには「自分を越えた何か」を考慮せずに考えていくことは難しいように思われる。

こうした問いに対して、天文学の知識を用いて解説したり、生死の問題を生物学的、医学的知見をもとに説明したりすることは可能であるように思われる。こうした科学的視点からの解答や説明は、その観察主体である人間の主観的な関わり、つまり人間が説明する対象とともに関わりながら生きていることの影響を、意識的にどうにか切り離そうとして得られた科学的な客観性に基づいて得られた知見であり、それを強みとしている点が特徴であろう。

確かに、そうした科学的な解答や説明は、我々が「もの」として生きている次元においては人

間の人生にとって非常に役立つことであるように思われる。実際に、医学技術の進歩は人間の寿命を長くしただろうし、そうした知見によってしか得られない利益というのがあると思われる。こと先進国に住む現代人はその恩恵を存分に被っているように思われる。しかし、上記の「なぜ」という問いに関していえば、「私が生きていること」との繋がりにおいて、なぜ太陽が動いているのか、なぜ生きているのか、そして死んでいくのかということに答えることは別の問題としてあるように思われる。そして、こうした次元の問いに対しては、何か「私が生きていること」を抜きにした知識で説明することでは不十分で、個人が生きていく中でこうした問いに、自分なりに応えていく他ないように思われる。特に、現代の日本においては「私が生きていること」との繋がりから上記の問いに答えることはなかなか困難なのではないだろうか。というのも、上記の問いに答えるためには、「自分を越えた何か」を想定せざるをえず、そうした「自分」と「自分を越えた何か」との間にある関わりや繋がりや拠り所となっていたと考えられる物語や神話は現代においては、解体されてしまっているように思われるからである。こうして考えていくと、現代の日本人はどのようにして自らの生の営みに存在する「自分を越えた何か」に関わり生きているのだろうかという問いを立てることが可能である。本稿では、この問いにいくらか応えていこうとするものである。

## 2 問題

### 「自分を越えた何か」と〈超越〉、〈超越性〉について

本稿では、〈超越〉、〈超越性〉ということばを用いるので、その定義を簡単に述べておきたい。超越とは、哲学的には古来から議論されてきた概念である。しかし、厳密な哲学的な定義を行なうことは、筆者の現在の力量を大きく超えることであるので行なわない。本稿では、河合（2002）、渡辺（2006）などを参考にして、本稿で用いる〈超越〉は、「自分を越えた何か」（例えば、力や存在など）のこと全般をさすことばとして用いることにする。文脈によって〈超越〉と「自分を越えた何か」を使い分けることがあるかもしれないが、基本的にこの二語は同義であるとして以下の論を進めたい。また〈超越性〉ということばについては、主体（注1）が〈超越〉を体験した際、その主体にとってどのように「自分を越えた」と体験されているか、というような〈超越〉の性質をさすことばとして用いることにする。

### 「臨床」とはどういうことか

〈超越〉ということを考えるにあたって、様々な視点が考えられると思われる。例えば、先述したように、超越ということば自体は哲学でもこれまで多くの議論がなされてきたことであろうし、〈超越〉にまつわるような心理学的事象についての臨床心理学研究も数は多くないが存在する。（この点は後述する。）

本稿では、心理臨床学的な視座に立って〈超越〉ということを考えることを目的としたい。したがって、この研究の土台を明確にするためにも、何故心理臨床において〈超越〉について考える必要があるのかということをも改めて考えてみたい。

では、まず臨床とはどういうことであろうか。皆藤（1998）によれば、『臨床』とは、文字通

り『床に臨む』の意である。そしてその『床』とは、『死の床』である。つまり、『臨床』とは、死の床にある人の傍らに座り、死に逝く人のお世話をすることを意味することばである。」としている。人間の生に寄り添うことを考えたとき、生きる過程を見ていくということは死に逝くことを見てゆくことである。臨床家という職業が成り立つならばそれは、セラピストという一人の人間が、クライアントという一人の人間が生きて死んでいく過程に関わっていく職業であるということになると思われる。

さらに『臨床』とは、人間がある世界から別の世界へ向かおうとする変容のプロセスに、現実とのかかわりを配慮しながらかかわる作業である」という。臨床という営みがこうした変容のプロセスに立ち会うことであるならば、こと心理臨床の営みにおいてその変容のプロセスに〈超越〉はどのように関わってくるのだろうか。

### 心理臨床学において超越性を考えることの意義

次に、心理臨床における変容のプロセスにおいて〈超越〉について考えることの意義について先行研究を基に考えてみたい。井筒・ヒルマン・河合（1983）において河合は、「夢分析の中で自分の意識を超えた何ものかが存在するすと感じたときに変容が起こり、そうした何か超越的なものに対するセンスを持った後は、すべてのものごとを、意識を中心とした見方ではなく、深い観点から見ることができるようになる。」と述べ、さらにそうしたセンスを持った後は、「私はこの人は自分自身でやっていける、分析を終わってもいいと考えます。」（河合、1989；渡辺、2006）と述べている。またJungはOtto（1917）のヌミノース概念を用いて、「自分の研究上の主な関心は、神経症の治療にあるのではなく、むしろヌミノースムへの接近法にある。事実を言えばヌミノースムの接近こそが真の治療であるといえるものであるから、ヌミノースムの体験に至れば病理的な呪いから開放される、というわけである。病気そのものがヌミノースムの性格を帯びている、とさえ言えるのである」（Jung, 1945；松田、2006）と述べている。

河合のこのことばからすると、クライアントが（従ってセラピストが）超越的なものに対するセンスをもつような変容を遂げることが、心理療法の目的の一つと考えられる。そして、超越的な存在に気づくことは、反対に個人の変容に関わっていることが示唆されている。これは、個人が自らの生の営みの中に存在している〈超越〉に気づき、「自分を超えた何か」を含めたところから、自身の新たなあり方を模索し、〈超越〉を生きていくという作業に立ち会うことが心理療法には求められていることを示すものであると思われる。Jungの言葉も、ヌミノースムを〈超越〉の一部として捉えるならば、心理療法における目的の一つとして〈超越〉への接近があることを示す言説であろう。従って、現代人がいかに〈超越〉を生きることを明らかにするということは、心理臨床面接のプロセスにおいて重要な意味をもつ体験の様相を研究するということであり、その意味で心理臨床学的な意義があると思われる。

### 超越性に関する先行研究について

次に、本研究でテーマとしている〈超越性〉に関連する心理臨床学的な研究をいくつか紹介する。心理療法における超越性をテーマとして扱った研究としては、渡辺（2006）が挙げられる。渡辺は、「無意識」を「私の中の私ならざるもの」として捉え、「私の中の私ならざるもの」の

「私を越える大きな働きや存在」のことを「超越性」「超越的なもの」と呼び、自身の夢分析を中心とした臨床体験をもとに、超越性の働きや意味をめぐって臨床心理学的な観点から論じている。

また、近接するテーマを扱った研究としては、松田（2006）が挙げられる。松田は、超越的な体験のひとつであると考えられるヌミノース体験について調査研究を行なっている。（注2）ヌミノース体験は、Otto（1917）が宗教的体験における「聖なるもの」から道徳や倫理などの合理的要素を差し引いた、合理的に説明しがたい部分のことである。その中で松田は、ヌミノース体験は、無意識に飲み込まれる危険性を孕むと同時に、その人の後の人生における「開け」を得る機会にもなりうると考えて、その肯定的側面を統合失調症者の心理療法につなげることの可能性について考察している。

渡辺の研究は、先述したとおり渡辺の実践する心理臨床面接における夢分析過程の中で得られた夢を素材として、心理療法における超越性についての考察がなされている。また、松田の研究においては、健常者にも調査が行なわれているが、同時に統合失調症者のヌミノース体験を扱い、被調査者として病院にこられている統合失調症者を対象として調査を行なっており、研究の目的としては、ヌミノース体験の統合失調症者にとっての治療的な意味を見出すことに主眼が置かれている。

#### 調査方法について

では、「〈超越〉をいかに生きるか」ということをテーマとして心理臨床学研究的な調査研究を行なうにあたって、どのような方法が必要であろうか。

〈超越〉体験の一つと考えられるヌミノース体験と類似性をもつ自我体験研究（西村（1978）、高石（1988））の方法論がそれまでの研究が質問紙調査中心であったことを受けて、天谷（1999）は、①自我体験は感覚的体験であり、書き言葉で説明するには困難な場合があること、②時には自殺や離人体験にもなりうるような危険も伴うため、面接の相互作用を通して柔軟に対応しながら体験を捉える必要性があること、③面接のやり取りを経るうちに、被面接者が当時の体験をより鮮明に思い出したり、状況を詳しく説明できたりすること、などの点から、個別の面接法による調査の必要性を説いている。

本研究の対象となる〈超越〉体験も、自我体験と同様に、語り手の存在を根底から揺さぶるような体験が含まれると予想されたことから、その体験内容を体験者から伝えてもらう場合には以下の点を考慮して調査を行う必要があると考えられる。第一に、調査者も被調査者も共に〈超越〉に向き合いつつ、それを語る被調査者を守ることができる場を設けてそこで被調査者から直接語りを聞くという形で調査を行うことが望ましいこと、第二に、質問紙調査による予備調査では内容が伝わりにくく語られにくかったこと、それに比べて直接会って話を伺う中においてはそれぞれの体験が語られたこと、そして第三に、実際に対面して、面接者と語り手が場を共有する中で面接者と被面接者の〈超越〉体験にまつわるコンプレックスが動き出してこそ語られる内容があるのではないかと考えられたことである。第三の点のように、〈超越〉体験に特有の必要性からも、個別面接によって筆者が面接者となり聴取するのが適切だと考えられた。調査対象者については、体験の言語化の問題を考慮すると、大学生が適切と考えられた。

### 3 目的

現代の日本において、非臨床群の青年がどのように〈超越〉を生きているのかという様相を明らかにすることを目的とした。その際の視点としては、第一に、体験者にとって何が「自分を越えた何か」と体験されているのか、第二に、体験者にとっての〈超越性〉について、第三に、体験者にとっての〈超越〉体験の意味についてという3つの観点から基本的な考察を試みた。

### 4 方法

調査時期は、2005年11月上旬から中旬にかけてであった。調査対象は、国立P大学の学生と私立Q大学の学生合わせて30名（19-25歳、男性9名：平均年齢22歳、女性21名：平均年齢：20.7歳）を対象とした。先行研究の批判的な検討や、一連の自我体験研究における方法論の検討などから、調査の安全性、エピソードの想起可能性、言語化可能性などを考慮して、筆者が面接者として個別に半構造化面接を行なった。

面接の流れとしては、描画（注3）を実施した後、「あなたが生きてこられた中で、『自分を越えた何か』を体験したことはありますか。」という問いを被面接者に伝えて、体験を語ってもらった。その際に、全く体験が思い浮かばない場合は、そこからの連想を求め、さらにこちらからの説明を加えた。その際、①具体的なエピソード、②体験時期、③体験のきっかけ、④体験時の気持ち、⑤体験による変化／影響、⑥体験の意味、⑦「自分を越えた何か」を空間的にどの辺に感じるか、について尋ねた。

面接過程の考察の方法としては、個別の面接過程を事例研究によって考察するのが適切であると考えられた。理由としては、「自分を越えた何か」にまつわる体験は、その内容をはじめとして、超越の性質、その体験による影響、体験の意味づけなどの点において、非常に個別性や特殊性が高い体験であると思われたためである。また、量的な分析を行った先行研究が少ないため、そのための枠組みを考える上でも、ひとまず個別の事例に入って探索的に〈超越〉体験を見ていく視点を模索する必要が感じられたためである。

従って、量的な分析や、各プロトコルを分析・分類するという意味での質的分析を行なうのではなく、個別の面接過程を事例研究的に考察し、その中で体験者が「自分を越えた何か」をどのように生きているのかについて検討していく方法を採用することにした。

本研究では、調査から得られた面接過程のうち一つを選び、考察の対象とする。事例の選別の基準としては、超越体験の典型の一つと考えられる自然体験を報告されたAさん（女性：20歳）との面接過程を取り上げることにする。

## 5 結果・考察

### 5-1 面接過程の概要

〈自分を越えた何かの体験？〉自分を越えた、ですか？（暫く沈黙して）綺麗なお空を見た時に、なんとなく。（微笑）広いなあとか思って。自分を越えた大きなものだなあって思ったりすることはあります。それは青く澄み切ったお空だったり、一度X地に行って、無人島に行ったことがあるんですよ。その時、浜辺で星空を見たんですけど、無人島だということで回りに何も光が

ないんですよ。だからすごく星空が綺麗に見えて、空気も澄んでいて、何かその時に。何か大げさな言い方かもしれないんですけど、宇宙を感じた気がしました。何か、星とか光って綺麗だなあとか普段は思わなかったりするんですけど、この星とかも、何億光年とか、そういう遠いところであって、昔から生きてたりして、すごいなあって思いました。またここで見えているのはすごいなあって。〈その時の気持?〉うわあ、凄いなあっていうのと、こう具体的には浮かばないんですけど、その時の気持を表現すると、とにかく「凄いなあ」って思っていました。〈広いとか宇宙とかから思い浮かぶこと?〉うーん……その関連なんですけど、生命とか人間とか考えますね。昔から、生命とか宇宙とかドキュメンタリー番組とかあるじゃないですか。何か(TV局の名前)とかなんですけど、親が好きだから一緒に見ていたんですけど、それが浮かびます。〈そういう体験を一番最初に体験されたのはいつ頃?〉「超えた」という感じがするのは、結構幼い時とかも空を見上げて思うことがあったので、きっと小学生の頃もあったと思います。広いお空を見ていると、すごいと思ったのと、おっきい雲を見ていたりとか。そうですね。一番なんかはっきり浮かぶのは、小学校の時の体育の時間に、なんか、晴れてるなーって事に気付いて、見上げたらすごく大きくて、何だかこう感動っていうのは言い過ぎかもしれないんですけど「うわー、広いなー」とか、ずっとこの先、あの青色しか見えないんですけど、ずっとこの先、ずっとずっと行くと、他の星とかがあって、また違う銀河とかあって、色々、想像を巡らせたりしてましたね。〈特に考えていたこととかありますか?〉特に考えてなかったんですけど、すごいなあって思った時に、うん、すごい抽象的なんですけど、頭の中がすごい開けたようなイメージを持ちました。頭の中が開けたような?〉何かすごい広いイメージがもたれました。「広い」という一言に尽きてしまうんですけど(笑)。〈広さとか大きさとかはどの辺に感じられる?体の感じとか、Aさんのどのあたりに感じられる?〉この辺ですね(笑)頭のとっぺんのちょっと上くらいになんか、変なことを言ってるかもしれないんですけど、とっぺんの上くらいが、ふわって開けた感じがします。〈Aさんが生きていることにどう関わっている?〉大きいものの中では、自分はおっきいものの中に内包される、多分重要ではない、一つのコマのようなものかなとか思うんですけど、その中でも自分は必死に生きていて、一生懸命生きていこうかって感じますね。「ちっぽけだけれど、もがきまくってみようかな」って気分になります。〈一番最初に体験された前後で、変わったこと?〉悩んでいる時とかに、その時の気持を思い出すようにすることがあります。ちっちゃいことで悩んでるけど、それは本当にちっぽけなことで、でも自分には大事なことで、その時のイメージを思い浮かべると、何でも頑張れる気がしてくるんですよ。あと、なんか綺麗なものを見ていこうって思うようになりました。〈きれいなもの。〉きれいなものとか身近なところで見落としているものとか…。うーん、色んなものに気づけるようになりたいと思いました。それくらいです。〈そういう体験は、今のAさんにとってどういう意味を持っている?〉今、自分の持っている価値観を形作っているものにはなっていると思います。たとえば、悩んだ時に自分が悩んでいることはちっちゃいことやなあって思って、もっと頑張っていこうって思ったり、綺麗なものをいっぱい見るようにしたいって思ったりとか、精神的な拠り所にはなっていると思います。だからといっていつもある訳じゃないんですけど、いつもそれを拠り所にするって言うような拠り所じゃないと思うんですけど、時々ふって考えて、「ああ、よかったなあ」って、その程度なんですけど。結構そういう時のことを考えると、へこんでいる時とかもちょっ

と心が晴れていく気がします。その懐かしい感じになったり、やっぱり理由もよくわかんないんですけど、何か衰しくなったりしますね。〈懐かしくなったり、衰しくなったり〉うん。何か矛盾しているみたいなんですけど、「かなしいなあ」と思う気持ちとほかって晴れるような気持ちと、混じった感じで、言葉でいうと郷愁というのに近い気がします。〈そういう時には大きさとか広さとか、頭の中が広がった感じ?〉がしますね。いつもは閉じているんですけど、広がるみたいな（笑い）閉じてるっていうか、なんか普段生活していると、目下のことしか考えられないじゃないですか。例えば「あした英語だ予習がある」とか。（笑）「今日の夜のご飯何しようかな」とか、そんなんしか浮かばないんですけど、そういう空のこととか考えると、結構そういう日常的な目前にある問題とか、そういうのしか見ていなかったこととか、視野が広がる感じがしますね。

## 5-2 語りについての考察

### Aさんにとっての「綺麗なお空」の体験の〈超越性〉について

Aさんにとって「お空を見た」体験はどのような点で「自分を超えている」だろうか。Aさんにとって、〈超越〉を感じるきっかけとして挙げられたのは「綺麗なお空」であった。Aさんは「お空」そのものを〈超越〉と感じたわけではなく、「何かそのときに、（略）宇宙を感じた気がしました。」と述べているように、それをきっかけとして宇宙的な時間的、空間的な広がりを感じ、その広さがAさんに「自分を超えている」と感じさせたのだろう。その時空の広がり、宇宙の無限性に通じるものであろう。

### 広さについて

次に、Aさんが感じた「広さ」について考えてみたい。Aさんにとっての広がり、は、「大きいものの中では、自分はおっきいものの中に内包される、多分重要ではない、一つのコマのようなものかなと思うんですけど」というように、自分を内包するおっきなものであると同時に、そうした広さを感じた後は「頭の中」にほかって開けた感じを体験するという点で、その広がり、は自分の内部に存在するものでもあるようである。つまり、Aさんにとって「綺麗なお空」をみて感じた宇宙的な広がり、は、Aさんを外から内包するものであると同時に、Aさんの内に開けているものであるともいえる広がりなのである。

### 「自分を超えた何か」の体験における「自分」のあり方

Aさんにとって、綺麗な空をみて広さを体験することは、Aさん自身をその中の「重要でない一つのコマ」であり「ちっぽけ」だと感じさせ、悩みがあってもそれはちっぽけなこととしてところが晴れるという。Aさんにとっては、単純に自分の存在の小ささを感じさせ、存在を圧倒したり、自尊心を低下させるような体験ではないようである。そうではなくて、自分という存在が、〈超越〉の広大さに比べればほんの小さなものであり、その意味で自分という存在の有限性を感じる体験であると同時に、Aさんという主体が帰るべき何か大きなものとのつながりを確認するという意味で、自分の存在の無限性への繋がりを感じて、Aさんに安堵や活力をもたらす体験でもあったと考えられる。

次に、Aさんの〈超越〉体験における「自分」のあり方に注目したい。Aさんは、「多分重要でない一つのコマのようなものかなと思うんですけど」と述べるように、自分の存在を〈超越〉の視点から捉えた後、「その中でも自分は必死に生きていて、一生懸命生きていこうかなって感じます。」としてもう一度、自分を越えた何かの内にある「自分」の存在を捉えなおすということが特徴であると思われる。言い換えると、〈超越〉を体験することで、「自分を越えた何か」の広がりから「自分」の存在の卑小さや有限性が顕わにされるのだが、その「自分」の有限性をもう一度「自分」の側から「自分を越えた何か」に向けて限定し直すことで、反対に「自分」を「自分を越えた何か」の中で確固たるものにしていくように思われる。

こうしたAさんの「自分を越えた何か」の体験における「自分」のあり方を、統合失調症者における〈超越〉体験との比較において考えてみたい。武野(1994)によれば、統合失調症者が体験する陽性症状の作為現象や迫害妄想などにおける超越的な存在は統合失調症者にとって「全能であり、後ろから自由にわれわれを操ることができる。背後からの力の作用に対しては・・・(略)・・・全く無力である。」と述べている。これは、超越的な存在に主体が圧倒され、自分を越えた何かに自分が飲み込まれている状態であると考えることが可能である。こうした統合失調症者の〈超越〉体験に対して、Aさんの場合は『自分を越えた何か』の一部としての「自分」を体験しながらも、その中で『自分を越えた何か』ではない『自分』を明確に持っているといえる。この点で、〈超越〉体験における主体の「自分」のあり方において、Aさんの体験と統合失調症的な〈超越〉体験とは明確に異なると思われる。

### 郷愁について

Aさんが「空」を自分を越えたものとして体験する時、その広大さに「凄いなあ」と感じるとともに、「かなしい」と同時に「ほかっと晴れるような気持ち」を体験しそれは「郷愁というのに近い」と述べる。こうした感情からはどういう事が考えられるのだろうか。

まず「凄い」という感情については、自分がちっぽけであると感じるほどの広大さに対して、かなわなさや畏怖の念のような、文字どおり「空を見上げる」ような感情であろう。

次に語られた「郷愁」という気持ちに注目してみたい。まず、郷愁とはどのような感情であろうか。広辞苑によると郷愁とは、「①他郷にある人が故郷を懐かしんで寄せる思い。ノスタルジア。②過去を懐かしむ気持ち。」とされる。つまり、故郷とは別の場所で、過去にいたことのある故郷を懐かしんでその故郷に寄せる思いのことであろう。では、なぜAさんにとって空の広大さは、故郷に感じるような感情を抱かせるのであろうか。

Aさんにとって、綺麗な空を見て、「自分を越えた何か」を感じる体験は、そこで宇宙であったり、何億光年生きてきた星々に思いをはせたりして、時間的、空間的な時間の流れを感じる体験であった。Aさんはこうした〈超越〉の時間的、空間的な無限性に、人間が生まれ帰ってゆくところの原初的な何かを感じたのだろう。それは、母子関係で言えば、出産前の母の胎内や、出産直後の母子一体の体験なのかもしれない。また、ここでの原初的なものとは、次のようにも考えられるだろう。小此木(1979)はFreudの「死の欲動」論を援用して、生から死を見るのではなく「生以前の存在としての死」を想定し、「死からいかに生が生まれるか」を論じている。こうして死を「生にとって原初的なもの」と考えると、Aさんの感じた無限性は、無につながる



も考えられ、「今生きている」Aさんにとっての故郷として「生きている人間がもともとあった状態としての死」が、宇宙的な広がりから連想されているようにも考えることができる。

河合（2003）は「近代以前の世界における宗教的な救いは、ユングが石との一体感を持ったように、神との結合、トーテム、自然や共同体との一体感である。」と述べている。Aさんの場合、ユングが石に感じたような、石と自分が交換可能であるような一体感を感じた訳ではないけれど、自分が宇宙的な時空の広がりとの一部であるという形で繋がりをを感じるという意味で自然との一体感を得て、宗教的な救いというところまで行かないまでも、少なくとも生活を営む上での活力を得ているといえるだろう。

しかし、いずれにせよ、郷愁を感じるには、故郷とは別の他郷が確固としてあってこそその感情であると思われる。そのように考えると、Aさんは帰るところがあっても、そこに飲み込まれることなく、「帰るべき死」という「故郷」から離れて、「今生きている」という他郷がはっきりとしていることが窺える。

## 6 まとめ

### Aさんにとっての〈超越〉体験について

Aさんの〈超越〉体験において、「自分を超えた何か」は「綺麗なお空」を見ていて感じた、時間的、空間的な宇宙の無限の広がりであった。

Aさんにとって、そうした体験は「自分を超えた何か」の広がりの中に内包される自分を体験すると同時に、自分の中に「自分を超えた何か」の広がりを経験するという内でもあり外でもある広がりを経験することになった。また、「自分」が「自分を超えた」大いなるものの一部であるということを確認して「『自分を超えた何か』の一部である『自分』」を経験し、「『自分を超えた何か』の一部ではない『自分』」を経験するという、両義性を孕んだ体験であった。これは、Aさんという主体が、宇宙の時間的、空間的無限性の一部であることを体験し、その広がりからするとちっぽけな存在であると自分の有限性を突きつけられる体験であるが、そこから逆に「自分」から「自分を超えた何か」方へ「自分」を定直し直すことで、「自分」の存在を際立たせるような体験だといえるだろう。

また、病的な〈超越〉体験との比較においては、〈超越〉体験における主体の「自分」と「自分を超えた何か」とのあり方が重要であると考えられることが明らかになった。この点は、更に研究を重ねていきたいところである。

### 調査面接を基にした心理臨床学研究の可能性について

こうして、心理臨床面接のクライアントではない青年に対しての面接調査を行い、その語りを考察してきたわけであるが、ここで心理臨床学研究における臨床群以外の被検者を募った面接調査研究の可能性について少し考えてみたい。

藤原（2007）は、心理臨床学の研究について述べる中で、調査面接研究について考えていく際に必要な観点として次の三点を挙げている。第一に、調査面接での半構造化面接による記述事例と心理臨床事例とが本質的に何が違うのか、違わないのかという点、第二に、調査面接で扱うテー

マが臨床実践に基づいたものであるか、その研究手法が心理臨床研究としての新しい手法であるかという点、そして第三に、クライアントを対象にした臨床心理面接に基づく事実ではないというだけで、心理臨床学研究ではないと言えるかという点である。本稿では、第三の点について若干の考察を加えてみたいと思う。

本研究では、被調査者は心理臨床面接にこられた方ではないことは先述したとおりである。しかし、心理臨床学が心理臨床実践の体験に根ざした学であることを考えると、心理臨床学研究において研究のもととなるのは、基本的に心理臨床面接における人間関係において生じた事象であるということができる。従って、こうした〈超越性〉についての研究も渡辺のように臨床事例の記録をもとに研究を行うことがまずは本筋であるといえるだろうし、その意味でこの研究は心理臨床学研究としては不十分であるといえるのかもしれない。

しかし、問題部分で述べたように「臨床」という営みが、セラピストという一人の人間が、クライアントという一人の人間が生き、そして死んでいく過程に寄り添っていくということであるが、心理臨床学研究において心理臨床面接にこられた方だけではなく、それ以外の人間のあり方を知ることにも実践に生きる知識となりうるのではないだろうか。

心理臨床面接にこられる方というのは、クライアントはその抱える課題の大きさよりなにより、援助的な関わりをのニーズを感じていて、そのニーズに応じて援助を求める方のことであろう。そうした援助ニーズを感じなかったり、感じていたとしても種々の事情で来談されない場合はその対象となりえない。こうした視点から見えていくと、心理臨床学研究は、面接の場に居合わせる可能性のあるクライアントかセラピストのみを対象として、その限られた人間関係から人間のあり方を見ていく研究にならざるをえないだろう。これは、心理臨床学が心理臨床実践体験を基にした研究分野であることを考えると、自明のことのようにも思える。しかし、心理臨床という営みが、クライアントやセラピストのみならず人間の生死に携わる作業であることを考え、そのベースとなる学問分野として心理臨床学を位置づけるならば、心理臨床学研究においては、心理臨床実践という場における人間関係をその主軸としてもつにせよ、心理臨床の枠外においておこなわれた調査面接から得られる人間のあり方についての考察は有意義なものと考えられる。

例えば、調査から得られた臨床場面では会うことのない現代人の人間像を知ることが、心理臨床面接を行う上でも有用であると思われる。また、心理臨床面接には来ず、調査面接という枠組みでしか会うことのできない人がいかに〈超越〉を生きているのかを知ることができるという可能性を秘めていると考えることもできると思われる。ただ、方法論の検討において述べたように、〈超越〉体験を語ると言うことは、その人の存在の根底を揺るがすような体験になりかねない。面接での臨床家としての配慮が必要な事は言うまでもない。

### 今後の調査にむけて

今回こうして超越についての調査研究を行なったのだが、まだ既存の研究が少なく、試みとしては本質的であると思われたが、基礎研究を欠いているという意味では探索的な研究になったようにも思われる。本稿での事例研究は、それ自体に一事例としての重みがあると同時に、〈超越〉を考える上での視点を模索するという探索的研究の意味も含まれている。今回得られた知見をもとに、〈超越〉についての数量的な研究を行なうこともひとつの試みかと思われるが、これ

は今後の課題としたい。

## 注

- 1 主体とは、生身の人間存在全体を示すことばとして用いることにする。Jungが用いた意味での自己という概念にも人間の全体性を意味することがあると考えられるが、自己がこころのみを連想させたり、自己と他者という二元的なニュアンスをすでに包含する可能性が考えられるために本稿では用いない。
- 2 ヌミノース体験とは、Otto (1921) が宗教における「聖なるもの」を追究して得られた概念で、その合理的な要素と、道徳的な要素を引き去ってもまだ残るものに注目し、ヌミノースと呼んだ。本研究で扱う「自分を越えた何か」の体験とも密接に関連しているものと思われるが、同義の体験として扱うには検討が必要であると考えられる。従って、本研究では「自分を越えた何か」の体験のひとつとしてヌミノース体験を位置づけておくことにしたい。
- 3 「自分を越えた何か」にまつわる体験は非常にプライベートな体験になると考えられた。また、語りとともに、被調査者の超越とのあり方を別の視点から見ていくことができると、被調査者像にふくらみが出てくるものと考えられる。従って、第一に被調査者とのラポールを取ること、第二に被調査者のあり方を語りとは別の視点から見ていくこと、を目的として、体験の語りの前に描画（樹木画、家屋画、室内画）を実施した。本稿では、紙面の都合上、描画の内容については取り扱わないが、面接内容に少なからず影響を与えたものと思われるので、調査の手続きとして実施したことを記しておく。

## 付記

本論文は、2006年度京都大学大学院教育学研究科修士論文「超越性についての一考察」の一部を加筆、修正したものである。論文作成にあたり協力してくださった大学生の皆様、ご指導いただいた藤原先生、桑原先生に感謝します。

## 引用・参考文献

- 天谷 祐子 (1999) : 資料 面接法による自我体験の調査方法について 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 46, 265~274.
- 井筒俊彦・ヒルマン・河合隼雄 (1983) : ユング心理学と東洋思想, 思想, 708, 岩波書店, 1-35.
- 大家聡樹 (2005) : 超越性についての一考察 京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊).
- 小此木啓吾 (1983) : 死の本能 岩波講座 精神の科学 10 有限と超越, 岩波書店, 67-105.
- Otto, R (1917) : Das Heilige. 山谷省吾 (訳) (1968) : 聖なるもの 岩波文庫 (青).
- 皆藤章 (1998) : 生きる心理療法と教育 臨床教育学の視座から 誠信書房.
- 河合俊雄 (2003) : 心理療法とポストモダンの意識 横山博 編 心の危機と臨床の知 4 心理療法言葉/イメージ/宗教性 新曜社 175-196.
- 河合隼雄 (2002) : 河合隼雄著作集第Ⅱ期第3巻 ユング心理学と超越性 岩波書店. (特に序章)
- 桑原知子 (2003) : 「自己」と「自己を越えるもの」 諸富祥彦・藤見幸雄 (編) 現代のエスプリ トランスパーソナル心理療法, 435, 189-197.
- 新村出 (1969) : 広辞苑 第二版 岩波書店.
- 高石 恭子 (1988) : 青年期の自我発達と自我体験について 京都大学教育学部紀要, 34, 210-220.
- 武野俊弥 (1994) : 分裂病の神話—ユング心理学から見た分裂病の世界— 新曜社.
- 西村洲衛男 (1978) : 思春期の心理—自我体験の考察— 思春期の精神病理 岩崎学術出版社, 255—285.
- 藤原勝紀 (2006) : 意識・無意識から心理臨床の知を考える 主に臨床イメージ体験を見つめる観点から 氏原寛・成田善弘編 意識と無意識—臨床の現場から— 人文書院 145—168.
- 藤原勝紀 (2007) : 創造の臨床事例研究 第3号 FJK.
- 松田真理子 (2006) : 統合失調症者のヌミノース体験—臨床心理学的アプローチ— 創元社.

諸富祥彦（2001）トランスパーソナル心理療法とは何か 諸富祥彦（編著）「トランスパーソナル心理療法入門」 日本評論社. 2-30.

渡辺恒夫・高石恭子（2004）：〈私〉という謎－自我体験の心理学 新曜社.

渡辺雄三（2006a）：夢にみる意識と無意識 氏原寛・成田善弘編 意識と無意識－臨床の現場から－ 人文書院 102-129.

渡辺雄三（2006b）：夢が語るころの深み 心理療法と超越性 岩波書店.

（心理臨床学講座 博士後期課程2回生）

（受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日）

## A Study of "Transcendence" from the Viewpoint of Clinical Psychology: On the Basis of an Interview about Experience of Something Transcending "I"

OOYA Toshiki

This study is about "transcendence" from the viewpoint of clinical psychology. According to Kawai(1983),problems of "transcendence" were related to changes of clients in a psychotherapeutic interview,and therapeutic changes occur when a client possess a sence of "transcendence". Thirty university students(nine males and 21 females) took part in this research interview.In this interview, they were asked "Have you ever experienced something transcending 'I'? After drawing three pictures. After examining interviews,it was clear that experience of something transcend "I"was diverse and special to individuals.Hence it was appropriate to examine interviews by a case study method.As a result,Following points have become clear .Firstly,it is important to consider what 'I' is in "something transcending 'I'experience" when we examine how it influences those who experience it. Secondly, this study has an importance as a study of clinical psychology though those who took part in this research are not clients of psychotherapy.